安全科学習指導案

授業者　神川　広光

「在校中の地震発生、その後」
～根拠を比べて問い直す～

１．学年・組　　３年東組

２．目指す子供の姿

安全科の学びを通して、災害が発生した際に起こり得る危険を予測し、回避するためにはどのような行動をとればよいのか、これまでに得た知識や学習経験を基に考え、判断し、「自分の命を自分で守る」ことのできる子供の育成を目指す。３年生の安全科では、年間の単元構成を通して学びを紡ぎ、「自助」から「共助」へと子供の意識の変容を捉えたい。

ここでいう「考え、判断する」とは、学んだ知識や技能を実際の課題に活用する、コンピテンシーを重視した学びを意味している。「学んだ知識や技能を使って自分で考え、判断し、他者と協力しながら実際の問題に対応する力」を育むことは、将来、自分の人生を自ら方向づけていくための重要な基盤になると考えている。

OECD の教育枠組み「Learning Compass 2030（ラーニング・コンパス 2030)」では、子供たちが未知の状況おいても、自ら方向性を見いだし、責任をもって行動できることを重視している。また、文部科学省の「第３次学校安全の推進に関する計画（2022～2026 年度)」においても、子供が自ら適切に判断し、主体的に行動するための資質・能力の育成を目指している。また、本校の学校目標の一つに「安全な社会づくりに主体的に参画する人間の育成」と示されており、６年間をかけて「安全に原則や概念に着目し、知識・経験・状況を関連付けることを通して、自他の生命尊重や生涯を通じた安全な生活・社会づくりを実現できる」資質・能力の育成を目指している。

以上のことから、本実践では、子供が自分とは異なる考え方や価値観に触れるとともに、インターネットを通して得られる情報を活用し、防災の専門家などから得られる情報を通して試行錯誤を重ねながら、命を守るために何が大切なのかを考える過程を重視する。そして、単に知識を身につけるだけでなく、身につけた知識を実際の場面で活用し、状況に応じて自ら考え、判断し、安全に生き抜こうとする姿を目指す。

３．本単元における学びを紡いでいく子供の姿

上記の目指す子供の姿を育むために、子供がこれまでの知識や経験を基に自らの問いをもち、他者との関わりの中で考えを捉え直しながら、学びを紡いでいくことが重要であると考える。

・一つの事象に対して、多様な考え方、安全に対する価値観を認める。
・様々な情報を活用し試行錯誤を重ねながら、命を守るために何が大切なのかを考える。
・実際の場面を自分に起こりえることと捉え、身につけた知識を基に考える。

例えば、災害（地震）が発生した際に命を守るという行動一つをとっても、その判断には様々な根拠がある。避難先までの距離を重視する場合もあれば、災害の種類や周囲の状況、避難経路の安全性を優先する場合もある。いずれも命を守るための判断であるが、置かれた状況によって適切な行動は必ずしも一様ではない。今回は地震発生後、数時間経った現状をテーマに子供の学びを紡いでいく。

子供たちは、これまでの安全科で得た知識や学習経験を基に、自分なりの考えを形成していく。しかし、自分とは異なる考え方や新たな情報に出会うことで、「本当に安全なのか」「なぜ、その行動が必要なのか」と疑問や違和感を抱くこともある。こうした問いをきっかけに、これまでの考えを確かめたり、必要な情報を調べ直したりしながら、自分なりに判断の根拠を見いだしていく。その過程を通して、知識として理解していた防災を、自分や身近な人の命を守るための判断へとつなげていくと考える。

また、ゲストティーチャーとの出会いも大切にしている。池田市役所防災危機管理課の方々をゲストティーチャーに迎えた学びをつくることで、附属特有の地域との関わりの浅さや自分事としての意識の希薄さを打開する手立てと考えている。これまでに「防災カードゲーム」「防災倉庫見学」などで関わりを作ってきた。この取り組みは年間を通じて行う予定をしており、『いけだ自主防災フェスタ２０２６』でプレゼン発表を行うカリキュラムを構成している。ゲストティーチャーとの関わりから子供の学びを紡ぎ、「自分たちにできること」「仲間と協力して命を守る大切さ」に気づいてほしい。

このように、これまでの学びを自分事として捉え、他者との関わりや多様な情報との出会いを通して、自らの考えを問い直しながら、状況に応じて根拠をもって行動を選択しようとする姿が、本単元における「学びを紡いでいく子供の姿」である。「防災教育」を通して「知識を身につけること」と「実際の場面で使えること」の違いに気づき、安全に生き抜く力をつけさせたい。

４．本単元で扱う材

（教材について）

扱う教材は、「災害への備え」である。学校や地域における災害への備えと、災害後に自分と仲間の命を守りながら生活を続けることを学習の対象とする。この単元では、ハザードマップ、防災倉庫の備蓄品や見学で得た情報、子供たちが構想した理想の町、学校の備蓄に関する資料などを学びの繋がりとして取り上げ、学びを深めていく。これらは、子供がこれまでに得た知識や経験を、自分たちの生活する学校や地域の具体的な状況と結び付け、命を守るためにどのように活用できるのかを考えることのできる教材であると考えている。

子供たちはこれまで、災害について調べ、ハザードマップを確認し、防災倉庫を見学するとともに、理想の町づくりに取り組んできた。こうした学習を、災害後の具体的な生活場面へとつなぐことで、備えを捉える視点を広げていきたい。例えば、水や食料が備蓄されていることを知っていても、それを使う人数や必要となる期間によって、十分に備わっているかどうかの判断は変わる。また、物資が用意されていても、それが必要な人のもとに届き、使える状態になるまでには、確かめるべきことがある。このように、数量、時間、使う人、届ける仕組みなどを関係付けて検討できることに、本単元で扱う教材の価値がある。

（材について）

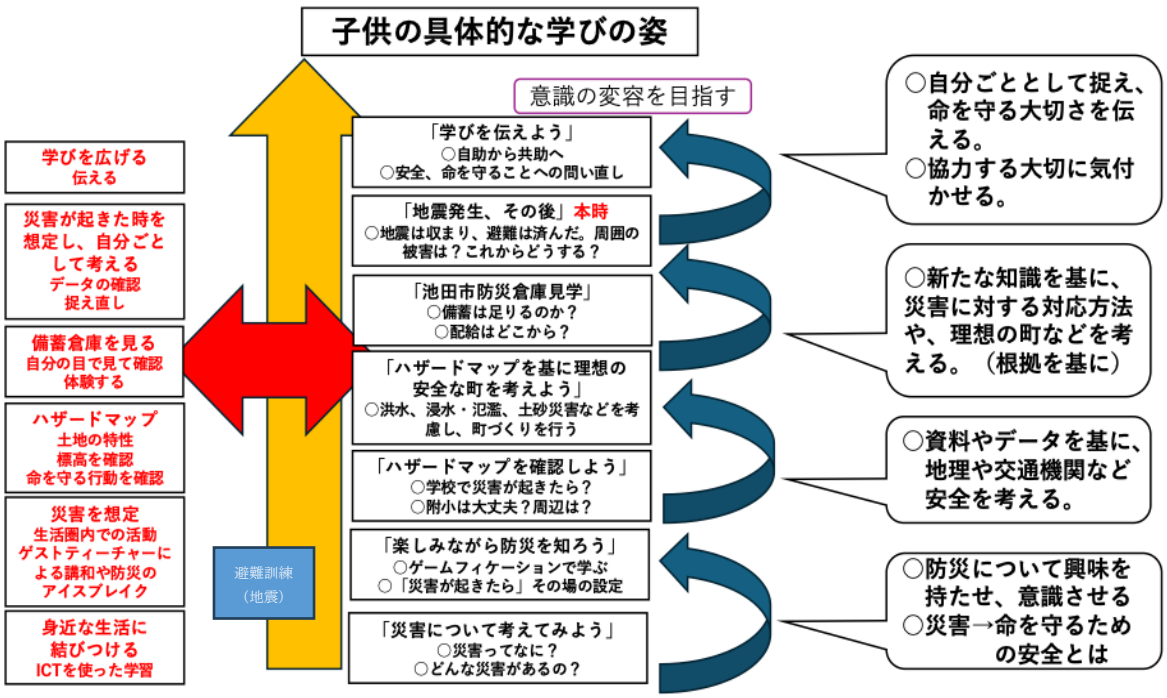
本校の総論では、材を「教師が学ばせたいこと」と「子供の興味及び課題意識」の重なりとして捉えている。**本単元において教師が学ばせたいことは、災害に関する知識や情報を活用し、状況に応じて自分と仲間の命を守るための行動を考え、判断することである。**子供が教材との関わりの中で「この備えで自分たちは安全に過ごせるのか」「今まで考えていた方法で本当によいのか」と疑問をもち、それを確かめるために情報を読み取り、必要な行動を考え始めるとき、教師のねらいと子供の課題意識が重なり、材が成立すると考える。互いの意見を聞き、自分の考えや根拠を基に捉え直した理由を共有する姿を着眼点にしたい。

石井英真（2022）は、材を介して教師と子供、子供どうしがともに対象に向き合う「共同注視」の関係を重視している。この考えを踏まえ、本単元では、資料のどこに着目したのか、何を根拠に安全だと考えたのかを互いに確かめながら、同じ対象を異なる視点から検討することを大切にする。友達の疑問や専門家の知見に触れ、それまで気に留めていなかった条件に目を向けることが、自分の考えを問い直す契機になると考える。

本時で扱う「地震発生、その後」では、在校中に地震が発生し、安全が確認された学校内の場所で一晩を過ごした後も、交通機関の復旧や保護者の迎えの見通しが立たず、引き続き学校で過ごす必要がある場面を設定する。能登半島地震では、道路の寸断や渋滞によって支援物資の到着に時間を要したことが報告されている。こうした事例も参考にしながら、「学校の備蓄は、今いる人数でどのくらい使えるのか」「物資が届く時期が分からないとき、それまでどのように過ごすのか」という問いを検討できる教材を構成する。学校の備蓄に関する資料や補給の条件に関する情報を、自分たちの予想と照らし合わせることで、さらに確かめる必要のあることや、今できることを考えられるようにする。

例えば、「備蓄があるから学校で過ごせる」と考えていた子供が、友達の「何人で何日使うのか」という問いに触れ、備蓄の量と利用人数、滞在期間との関係を調べ始める姿が考えられる。このとき、備蓄は、その有無や種類を知る対象から、自分たちが安全に生活を続けるための条件を確かめる対象へと意味を変えていく。本時では、池田市役所危機管理課の職員をゲストティーチャーに迎え、子供とともに資料や問いに向き合い、専門的な知見を交えながらそれぞれの判断が成り立つ条件を確かめていく。こうした他者との関わりを通して、子供が何に着目し、何を確かめようとするようになったのかに、材の変容を見取っていきたい。

本単元を通して、子供が災害への備えを自分たちの生活と結び付け、データを根拠に考えを問い直しながら、必要な行動を選択することを目指す。さらに、分からないことを確かめ、困っていることを伝え、他者と協力して必要な支援を求めることも含めて、学んだ知識を「己の命を己で守る」ための判断や行動へとつなげていきたい。



５．評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
地震や豪雨によって起こり得る危険と、危険を避ける方法、地域や学校の備え・支援の役割を理解している。また、ハザードマップや備蓄資料から、自分と仲間が安全に過ごすために必要な情報を読み取っている。	災害時に必要なことを、資料の情報や友達・専門家の考えを比較・分類しながら捉え、自分と仲間の命を守る行動を想定している。また、データを根拠に行動を問い直し、状況に応じた行動とその理由を説明している	自分や仲間の安全を地域の備えや支援と関係付けて捉え、友達や専門家と関わりながら必要な情報を進んで確かめ、自分たちの考えを見直しながら、命を守る行動について考え続けようとしている。

６．単元計画

次	時	学　習　内　容	子供の姿 予想される子供の姿
1	1	防災について考えよう～災害って何？～ 【災害領域・安全】	知っている災害を身近な生活と結び付け、災害によって起こる困り事を挙げながら、自分や仲間の命を守るために調べたいことを見いだしている。
	2	災害を知ろう 【災害領域・総合】	地震や大雨などによって起こる危険を比較し、災害の種類によって危険な場所や必要な備えが異なることに気付いている。
	3	ゲリラ豪雨の対応について 【災害領域・総合】	短時間に強い雨が降ったときの川や道路の変化を捉え、登下校や遊びの場面で危険を避けるために確かめることを考えている。
	4	楽しみながら災害を知ろう 【生活領域・総合】 池田市役所（出前授業）	出前授業で知った地域の防災の取組を自分たちの生活と結び付け、災害時に役立つ備えや行動について、疑問に思ったことを確かめようとしている。
	5 6	ハザードマップを確認しよう 【生活領域・総合】	ハザードマップの色や記号を手掛かりに、学校や生活する地域で起こり得る危険を読み取り、場所ごとの違いや、さらに確かめたいことを整理している。
	7 8	理想の町づくり 【生活領域・総合】 作成	調べた危険や必要な備えを基に、避難する場所や防災倉庫などの配置を考え、命を守るための工夫とその理由を町の作品に表している。
	9	災害倉庫見学 【災害領域・総合】 校外学習	備蓄品の種類や用途、管理する人の働きに目を向け、「誰が、いつ、どのように使うのか」を確かめ、地域の備えが自分たちの安全を支えることを捉えている。
	10	理想の町づくり 【生活領域・総合】 話し合い	見学で得た情報と友達の考えを基に、町の作品の備えや配置を比べ、災害時に役立つかを話し合い、必要な工夫を加えようとしている。
	11 12	災害時の過ごし方を考える 【災害領域・総合】	水・食料・トイレ・休息など、災害後の生活で必要になることを分類し、い

		調べ	つ、どのような場面で困るのかを考えながら、必要な備えや行動を調べている。
	13	災害時の過ごし方を考える 【災害領域・総合】 発表	調べた備えや行動を、必要になる場面や理由とともに伝え、友達の発表との共通点や違いから、さらに確かめたいことを見いだしている。
2	**14 本 時**	地震発生、その後 【災害領域・安全】	学校での滞在が長引く状況を想定し、備蓄の量や利用する人数、補給の見通しを基に、自分と仲間が安全に過ごすための行動と必要な確認を、友達や専門家と考え直している。
	15	災害時の過ごし方 【災害領域・総合】 問い直し	本時で残った疑問について必要な情報を調べ直し、初めの考えと比べながら、学校で安全に過ごすための行動を、理由を添えて見直している。
	16	「ものがある」から「誰に届くか、どう使うか」【災害領域・総合】	備えの有無だけでなく、使う人や届くまでの過程、使える条件に着目し、自分や仲間に必要な物資・支援とその活用方法を考えている。
	17 18 19	まとめ学習 【生活領域・総合】 公式情報、地域情報、数量情報→表やグラフ AI やネットを使ってクリティカルシンキングを養う	教師とともにＡＩやインターネットで得た情報を公式資料などと照らし、発信元や日時を確かめている。地域や数量の情報を表やグラフに整理し、安全な行動を考える根拠として用いている。
	20	フィールドワーク 【交通領域・安全】 物資が届かない、移動が必要になるケース	教員と地域を歩き、道路や避難先の様子を地図上の情報と比べ、物資が届く経路や移動が必要な場合に、確かめるべき場所・条件を見いだしている。
	21 22	まとめ 【生活領域・総合】	学習の初めと今の考えを比べ、自分と仲間の命を守る行動を、状況と根拠を結び付けてまとめ、今後も確かめたいことを明らかにしている。
	23	校内発表 【生活領域・特活】	自分たちが考えた安全に過ごす方法を、資料や地域で確かめたことを根拠に伝えている。聞き手の質問や意見を受け、自分と仲間の安全について引き続き考えようとしている。

７．子供が学びを紡いでいく過程〈他者との関わりによる材の変容に着目して〉

子供たちは、これまでの安全科の学習において、災害に関する知識を身につけ、ハザードマップの確認や防災倉庫の見学、調べ学習などを通して、地域の安全について考えてきた。そして、それらの学びを基に、災害に強い理想の町づくりに取り組んできた。

こうした学習の中で、子供たちは「どのような場所が危険なのか」「安全な町には何が必要なのか」など、それぞれの興味や課題意識をもちながら、様々な教材と関わってきた。教師が学ばせたい**「危険を予測し、情報を根拠に安全な行動を判断すること」**と、子供自身の興味や課題意識が重なり合うことで、一人ひとりにとっての材が成立していくと考える。

本時では、これまでに得た知識や学習経験を基にした自らの考えを、友達や防災の専門家との関わりを通して捉え直す過程を大切にしたい。その際、石井英真が示す「共同注視」の視点を踏まえ、教師が一方的に知識や正解を伝えるのではなく、子供と教師、防災の専門家がともにデータや課題に向き合い、考えを深めていく関係を重視する。

例えば、避難先までの距離を根拠に安全性を判断していた子供が、友達の「そこへ向かう道は安全なのか」という考えに触れることで、これまで着目していなかった危険に気付くことが考えられる。そこで、子供たちが同じハザードマップや避難経路に関する情報を見つめ、それぞれの判断の根拠を確かめ合う。その中で生まれた疑問や違和感を、防災の専門家も交えて検討することで、「本当にこの判断でよいのか」「他に確かめるべき情報はないのか」と、新たな問いが生まれていくことが期待される。

このように、個々の子供がもつ材が、他者との関わりを通して共有され、互いの考えを捉え直す契機となることで、共通材としての役割を果たすと考える。ここで重要なのは、友達や専門家の考えをそのまま受け入れることではなく、同じ材に向き合いながら、それぞれの着眼点や判断の根拠の違いを明らかにし、自らの考えを問い直すことである。

こうした学びの過程を通して、これまで地域の危険を知り、理想の町について考えるために活用してきたハザードマップや様々なデータが、自らの命を守るための行動を判断する根拠として、新たな意味や価値をもつようになると考える。また、子供自身が向き合う課題も、「どのような町が安全なのか」から「自分はどのように行動すれば命を守ることができるのか」へと広がり、深まっていくことが期待される。

他者とともに材に向き合い、そこから生まれる疑問や違和感を基に、自らの考えを問い直し続ける過程を大切にしたい。そして、子供がデータを根拠に試行錯誤を重ねながら、自ら考え、判断し、「己の命を己で守る」ための学びを紡いでいく姿を目指す。

８．本時の目標

学んだ情報を比較・整理しながら、自分と仲間が安全に過ごすために必要な行動を考え直し、その理由を根拠ともに説明する。【思考・判断・表現】

９．本時の展開

１．これまでに防災について学んできたことをふりかえる。
- 災害の種類、ゲリラ豪雨、出前授業など。
- ハザードマップを確認して、理想の町づくりをおこない話し合った。
- マップを確認すると、附属池田小は大きな災害予想はなかったが、その周辺の被害は大きかった。

２．学校で地震が起きた。そしておさまったその後を考える。
- 災害に対して学んだ行動を思い出そう。
- 迎えは来るのかな？家に帰れる？揺れがおさまった後も、家の壁やガラス、電柱が倒れているかもしれない。
- 学校は大丈夫？周辺や交通機関は？電車は？

３．学校周辺の被害は少ないが、周りの交通機関が大きな被害を受けていた場合を想定して、今後の過ごし方を考えよう。（ペア）
- 学校に宿泊することになったら何が必要かな？
- 附属池田小の備蓄や予備発電はどうなのかな？
- 全校児童＋地域の住民も過ごすのかな？安全に過ごせるかな？
- 水や食料はどのくらいあるのかな？物資はいつ届くのかな？

４．ペアや全体で話し合ったこと、考えたことをもとに指導者と学校での過ごし方や想定される困難を考え再考する。
- 水が出ない場合、すぐにトイレはいっぱいになるかも。ニオイの問題もあるんだよ。そこまで考えていた？自分にできることは？
- 寝る場所のプライバシーはどうなるのかな？どこで寝る？
- 備蓄の食料や飲み水、毛布は人数分あるかな？
- ネットの情報や学習だけじゃ対応できないことはいっぱいあるよ。

５．ふりかえりを書く。

他者との関わりと材の変容

今までの学びをふりかえることを通して、地震がおさまった後の危機予測や被害の状況を予想させる。その後の行動や判断、考えなどの違いが共通材になりえると考える。

共通材を通して、これまでの学びを活用し、防災の専門家などから得られる情報を通して試行錯誤を重ねながら、命を守るために何が大切なのかを考える過程を重視する。

話し合いを通して、インターネットから得られるデータやこれまでの様々な情報などにはなかった新たな情報と出会い、比較することにより、防災に対する考えを再考する姿が自分ごとと捉えて「考え、判断する」姿だと言える。

見取り：友達や防災の専門家の考え、資料の情報と自分の予想を比べ、備蓄や設備が使える条件などへの着目がどのように広がったかを見取る。また、それらを根拠に、自分と仲間が安全に過ごすための行動をどのように問い直しているかを、発言やふりかえりの記述から捉える。

これまで学んだ情報を比較・整理しながら、自分と仲間が安全に過ごすために必要な行動を考え直し、その理由を根拠とともに説明することができている。

１０．座席表

前

		1	2		3	4		5	6
7	8	9	10		11	12		13	14
15	16	17	18		19	20		21	22
23	24	25	26		27	28		29	30
			31		32	33			

１１．参考文献

OECD（2019）Learning Compass 2030

OECD（2019）Anticipation-Action-Reflection Cycle

文部科学省（2019）「生きる力」をはぐくむ学校での安全教育

石井英真（2022）提言「子ども主語」の主体的な学びをデザインするために（１）（２）

国土交通省　ハザードマップポータルサイト身のまわりの災害リスクを調べる

国土交通省　防災学習ポータルサイト

NPO プラス・アーツ「イザ！カエルキャラバン！」防災カードゲーム

文部科学省（2026）実践的な安全教育の推進について（交通安全・災害安全）

【本校安全科で作成している資質・能力表と領域表】



2026年度「安全科」資質・能力表（改訂版）

	知識・技能	思考・判断・表現	主体性
低学年	日常生活において自分の命を守るために必要な知識・技能を身に付ける。	自分の命を守るために身の回りのことを比較しながら、安全な生活を送る上で必要なことを具体的に想像することができる。	自分の命を守ることができるように、自分の身の回りの安全について考え続けようとしている。
中学年	日常生活において自分と仲間が安全に生活するために必要な知識・技能を身に付ける。	自分の命、仲間の命を守るためにどのようなことが必要かを比較・分類しながら、様々な場面や状況に応じた行動を想定することができる。	自分の身の回りだけでなく、地域との結びつきにも触れながら、自分と仲間の命を守ることができる行動について進んで考え続けようとしている。
高学年	人々が安全・安心に生活できる日常や社会を実現するために必要な知識・技能を身に付ける。	自他の生命を尊重するために、様々な場面や状況を想定した上で、根拠をもって行動を選択することができる。 また、安全・安心な社会づくりのために取り組まれてきたことについて、他者に対して表現することができる。	生涯にわたって自他の生命を尊重する行動について進んで考え続け、安全・安心な社会づくりに参画し、貢献しようとする。

「安全科」実施領域＆内容（例）

【災害安全】
登下校中に
地震が起きたら
（2年生）
防災ミュージアムを
つくろう
（4年生）
災害に備えた日常生活
（6年生）

【交通安全】
登下校の安全
（1年生）
自転車の点検、
ヘルメット着用って
なぜ必要？
（3年生）
自転車の事故の加害者
にならないために
（5年生）

【生活安全】
身の回りにある危険から
身を守れる道具は
どんなもの？
（低学年）
臨海学舎に向けて
（5年）
安全・安心な社会を
つくるために
（6年）

【防犯】
防犯ブザーの使い方
（1年）
暗くなる前に帰るのは
なぜ？（3年）
防犯避難訓練は安
全・安心につながるのか。
（6年）

【現代課題】
個人情報（ID・パスワード）の取り扱い（1年生）
写真を撮る時に気をつけること（3年生）
情報社会～生成AIから考える～（6年）

＊各学年3領域＋αを網羅的に学習しています。